みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

社会人類学・民俗学における村落社会研究の動向：奄美・沖縄地域を中心に

メタデータ	言語: ja	
	出版者:	
	公開日: 2014-03-26	
	キーワード (Ja):	
	キーワード (En):	
	作成者: 須藤, 健一	
	メールアドレス:	
	所属:	
URL	http://hdl.handle.net/10502/5171	

社会人類学・民俗学における村落社会研究の動向
——奄美・沖縄地域を中心に——

この研究動向は、奄美・沖縄地域の論文・資料報告のうち、村落社会に関係あるものをあつかう。期間は、蒲生正男（『村落社会研究』第五集、一九六九）のあとをうけて、一九六九年四月から一九七三年一二月までとする。しかし、課題によっては、その期間をはみでた業績について触れることがある。課題は前回の村武精一に準拠して設定する。

村落の組織　沖縄の村落組織は、従来から、親族体系・祭祀と不可分な相関々係にある存在として把握されてきている。それゆえ、村落と祭祀組織の項で詳細に紹介することにし、ここでは、村落組織自体ないしそれと関連する論文や視点をとりあげる。

まず、歴史的展開との関連で村落をとりあつかったものとして、仲松弥秀『神と村―沖縄の村落―』（琉大沖縄文化研究所、一九六八）「古層の村」（『村落共同体』木耳社、一九七一）、稲村賢敷『古代村落マキョの研究』（琉球文教図書、一九六八）「古代部落マキョから農耕村落への発展」（『村落協同体』木耳社、一九七一）がある。仲松は、鳥越憲三郎や仲原善忠の視点をふまえて、集落移動の型・地割制度・中国の風水思想などを考察し、〈単一マキョ（村落）〉から〈複合マキョ〉、すなわち〈血縁

村落〉から〈地縁村落〉へという展開図を提示している。稲村は、マキョ遺跡や記録文書の考察から、〈狩猟漁猟等の自然物採集に依って生活したマキョと称する古代部落〉から〈中世農耕村落〉への移行を指摘している。両者は、長年の調査研究の成果を多くの論文で発表しており、前掲書および論文は、それらの一部である。また、村落研究の適切な解説を、小川徹が『沖縄文化論叢』㈢（平凡社、一九七一）で、研究史的におこなっている。

概して、沖縄の村落と物質的基盤ないしは生産活動との関連をテーマにした論文は少ない。野口武徳「沖縄糸満婦人の経済生活―とくにワタクサー（私財）について―」（『成城文芸』四四、一九六八）は、なかでも、糸満女性の経済活動と女性（主婦）の地位の安定性を関連づけた点で興味深い。渡辺欣雄「沖縄本島北部の経済制度と社会組織」（『薩琉文化』一、一九七一a）は、小論であるが、門中形成と経済制度の変遷過程との関係を考察したものである。

つぎに、社会組織との関係では、福田アジオ「沖縄村落における近隣組織」（『南島の民俗（第一報告）』一九七一）の視点は注目すべきである。〈村落を諸社会組織の重層・複合として把握〉するなかから、〈村落そのもののあり方〉を明らかにするとともに、〈村落を政治体制の歴史的展開との関連で把握〉するという視点で、村落を経済的側面（とくに土地制度）から把握するという視点と合わせて、従来の社会人類学的アプローチでは、等閑視されていた方向に対する問題提起である。こうした側面からの研究は、今後の村落研究において、一つの軸になると思われ、具体的な調査資料に基づく理論化が大いに期待される。渡辺欣雄「沖縄地方議会議員選挙における投票の性格―沖縄東村字宮城の事例考察―」（『民俗学評論』六、一九七一b）は、日常的生活場面で、住民の最大関心事である選挙をとりあげ、その投票行為に顕在化した村落社会の人間関係の分析を試みたユニークな論文である。

家族・親族・婚姻　家族研究については、従来から、親族研究に比較すると遅れた分野である。反面、それは相続継承（長男子単独）、出自（父系）、養取慣行（男系ないし非男系男子：他系混交〈タチイマヂクイ〉の問題）、位牌祭祀（同一出自成員：兄弟重なり合い〈チョーレーカサバイ〉とイトコ重なり合い〈イチクーカサバイ〉の問題）、兄弟姉妹関係（女性の霊的優位：〈オナリ神〉）や女性の地位（婚出女性の成員権）などの側面で、親族レベルに包含された形では、多く考察されてきている。そのために、沖縄の家族を独自の体系として摘出して、親族体系のなかに位置づけるという視点が乏しかったように思われる。沖縄の家・家族の問題を積極的にとりあつかった論文として、渡辺欣雄「北部沖縄の親族体系―東村川田の事例考察―」（『民族学研究』三八の二、一九七三）は注目される。

渡辺は、家を出自集団（門中・バラなど）の基本単位とみなし Lebra, W.H. ("Okinawa Religion" Univ. of Hawaii Press. 1966 邦訳『沖縄の宗教と社会』弘文堂、一九七四）の用いる household・family と同義に位置づけている。そして、

〈出自集団の分節化はその基本単位（傍点筆者記）の分裂、新単位の生成という形〉で行われ、lineage の基本単位とされる minor lineage のそれとは、様相を異にすることを示唆している（一二五頁）。このことを拡大解釈すると、lineage システムにおいては、養取慣行が不可欠でないにもかかわらず、沖縄の親族体系において、家の（超世代的）存続希求の手段として、何故、養取慣行と系譜の序列化（＝家号の付与）が必要とされるのかを解明する手がかりを与えているように思われる点で、鋭い指摘といえよう。また、〈血筋・家筋・屋敷筋〉の分析概念で把握されてきた沖縄の家に、その存在形態的位置づけを明確化しようと試みた面でも興味深い。山路勝彦「〈門中〉と〈家〉に関する覚書」（『日本民俗学』七八、一九七一）は、日本本土の〈家〉との比較で、沖縄の家は〈父系の原則に従って、父・息子の関係が強調〉されているのがうかがえるから、〈父系家族〉と規定できるとしている（五〇頁）。家族構成については、宮里進勇「沖縄社会における家族構成」（『清和女子短大紀要』二、一九七〇）がある。

親族研究においては、門中を主体にする親族組織の解明が中心テーマになってきた。琉球・奄美にかけて多様に展開する、〈門中〉〈バラ〉〈一門〉〈チュチョーデー〉〈ヒキ〉などの親族集団ないし関係については、村武精一（「琉球・奄美の社会人類学」『日本民族学の回顧と展望』一九六六）がすでに概念規定を与えている。それによると、〈門中〉〈バラ〉は、社会人類学で用いる sib ないし clan、〈チュチョーデー〉は、lineage（いずれも、"agamous"＝族内婚や族外婚という婚姻規定をともなわない父系出自集団）として把握可能である。

実際に、沖縄本島中・南部にみられる典型的な門中は、一人の男先祖を共有する父系血筋の集団で、その内部にいくつかの分節集団を擁し、〈門中墓〉をその象徴的表象として所有し、〈清明祭〉などの祖先祭祀に corporate group の性格を顕現化させることを特徴とする。しかし、沖縄本島の辺隅地域や近接の小島嶼の個別研究が進展するにつれて、父系血筋の貫徹を特徴とする門中組織の地域的変差の問題がとりあげられてきた。まず、それを積極的にとりあつかった論文として、山路勝彦「沖縄・渡名喜島の門中についての予備的報告」（『日本民俗学会報』五四、一九六七）・「沖縄小離島村落における〈門中〉形成の動態―粟国島における父系親族体系としての〈門中〉の若干の考察―」（『民族学研究』三三の一、一九六八）、松園万亀雄「沖縄座間味の門中組織」（『日本民俗学』七一、一九七〇）、渡辺欣雄「沖縄北部一農村の社会組織と世界観―大宜味村田港の事例―」（『民族学研究』三六の二、一九七一ｃ）があげられる。

山路は、渡名喜島・粟国島の養取慣の事例をとおして、〈養子を祖先を異にする系統から迎える〉ことによって生ずる、二種の門中、すなわち、〈シジ（男系血縁）の門中〉と〈タチイ（他系）の門中〉との同時併存の様態とその理論化を試みた。松園は、山路の二論文に〈触発〉されて、座間味島を調査し、二種の門中の形成条件の考察から、それらを、〈家筋の門中〉から〈血筋の門中〉への再編成過程における変化としてとらえようとし

た。この松園の位置づけに、山路（一九七三b後掲、二九一頁）は疑問を投げかけたが、松園の、前者を〈非血縁者も含む門中〉、後者を〈男系血縁の貫徹する門中〉（一頁）の意味にとれば、疑問も解消するであろう。両者は、それらの諸島においては、男系血縁の貫徹しない門中が存在する（した）ことと同時に、門中の用語使用もその成立も比較的新しい点を指摘している。また、久米島の門中組織についての牛島の報告は興味深い。牛島巌「久米島の祭祀組織」（『伝承文化』八、一九七三）によると、久米島には、〈門中〉という用語も実体もみられず、養取慣行においても、〈同一門の男子を養子にとるべきという原則が存在しない〉（二六頁）ことから、前述諸島の前段階に位置づけている。しかし、沖縄本島南部においては様相が一変する。

村武精一「沖縄本島・名城の descent・家・ヤシキと村落空間」（『民族学研究』三六の二、一九七一a）によると、養子は父系の男血筋の者ばかりであって、つねに〈父系男血筋の再生産の原理〉にしたがっており、〈男系家筋（male family-line）〉と〈父系男血筋（male descent line with patrilineal）〉の整合が強く希求されているという（一二四頁）。山路勝彦「沖縄佐敷村屋比久部落の門中組織」（『伝承文化』八、一九七三a）でも、門中の構造を安定させるために、家（ヤー）は男系を貫徹しなければならないとしている。また、本島北部においても、同様な報告が、中根千枝「門中と村落―今帰仁村与那嶺―」（『沖縄の社会と習俗』東大出版会、一九七〇）でなされている。

この地域的変差の大きい門中組織の解明にあたっては、記録文書（とくに家譜）の分析による歴史的視点も不可欠である。渡口真清「門中の成立」（『研究余滴』四六、一九六七）・「系図と門中」（『沖縄文化』二五、一九六九）、宮良高弘「家系からみた沖縄の社会組織」（『沖縄の社会と習俗』東大出版会、一九七〇）、大胡欽一「琉球士族門中の構造―清明祭を中心として―」（『政経論叢』四〇の五・六、一九七二）は、その意味で示唆深い。なかでも、首里の士族階層の家譜分析から、〈位牌と墓地を揃えて門中というのが成立する〉のは、〈サツマ入後〉（一七世紀以後＝筆者記）という、渡口（一九六九）の提言は、大きな意味をもつ。大胡は、現在、沖縄で進行過程にある〈門中化〉現象の民俗的モデルにされる、首里の一士族門中をとりあげ、系図分析をはじめ、祖先祭祀・分節化・葬制などを考察して、その構造を構築している。また、長年にわたってその問題を追求している小川徹の「沖縄民俗社会における〈門中〉（仮説的総括）」（『日本民俗学会報』七四、一九七一）・「百姓門中における清明祭受容の一事例―『家風祭典』の紹介―」（『日本民俗学』七九、一九七二）も興味深い内容を提出している。ほかに、門中一般をとり扱ったものとして渡辺欣雄「沖縄北部農村の門中組織―大宜村字田港の事例―」（『日本民俗学』七四、一九七一b）・「未慮の出自体系―沖縄東村字平良の事例―」（『社』四の三、一九七一e）がある。

つぎに、門中に比肩しうるほど確固とした出自集団が見出せない地域に目をやると、奄美に関する、牛島巌「親族」（『薩南

諸島の総合的研究』明治書院、一九六九a）、須藤健一「奄美の〈ヒキ〉その父系的側面―喜界島の資料から―」（『社』三の三、一九七〇）・「喜界島の親族組織」（『日本民俗学』七八、一九七一）、牛島巌編「与論島調査予備報告―パラジ・イハイ祭祀・シニグ―」（『社』五の一、一九七二）があげられる。いずれも、〈ヒキ〉〈パラジ〉と指称される祖先志向型の族縁概念の分析を試み、それらが祖先祭祀や氏子集団などの集団形成の側面では、父系ラインが、原則として強調されることを指摘している。（先島地域については、親族組織を独自のテーマとしてあつかった論文は見あたらない）また、〈ウェーカ〉〈パロージ〉〈ウトウザ〉などと呼称される〈ego-centered な族縁概念〉（村武、一九六六）に関する考察も、門中組織ないし〈ヒキ〉との関連で、多く論じられている。しかし、それ以後の理論的展開はみられず、概して、その範囲・機能・性質などから personal kindred として把握されているように思われる。

門中・親族・家族についての研究史とその理論的位置づけは、馬淵東一が『沖縄文化論叢三』（平凡社、一九七一）、また、社会構造についての包括的な論究は、大胡欽一が『現代のエスプリ七二』の解説でそれぞれ展開している。

最後に、沖縄・日本本土・中国（台湾）・朝鮮の親族組織の比較を試みた論文をとりあげてみよう――松園万亀雄「沖縄の位牌祭祀その他の慣行にみられる祖先観と血縁観について」（『現代諸民族の宗教と文化―社会人類学的研究―』社会思想社、一九七二）、中根千枝「沖縄・本土・中国・朝鮮の同族・門中の比較」（『沖縄の民族学的研究―民俗社会と世界像―』日本民族学会編、一九七三）、村武精一「沖縄民俗文化をどうとらえるか」（『地域開発』八五、一九七一b）、山路勝彦「台湾福建人の宗族組織について」（『民族学研究』三七の四、一九七三b）・（一九七一a）。

松園は、〈祖先観〉のなかにしめる〈血縁観〉の比重を問題にし、〈祖先観〉の内容を左右する重要な要素を養取慣行と系譜観とに求めている。養取慣行のありかたから、〈一方の極として、中国・朝鮮における異姓不養、血筋の門中における同門養取、他方の極として、かかる規制のまったくない本土の家制度〉という位置づけをしている（二八八頁）。村武も祖先祭祀の構造（生者が先祖とのつながりを求めて自己の出自と社会的位置を認識する方法）を指標に、〈東アジア高文明社会〉の比較研究への指針を披瀝している。中根は、四社会の親族組織を比較し、〈父系血縁のシステム（patri descent）〉が明確で、〈父系血縁の原理が、家族・同族構造を規定する〉中国（漢人）社会を一方の極に、〈家長の継承線が、「家」・同族構造を規定し〉、きわめて〈場を強調する〉日本社会を他方の極にすえている。そして、前者に近く韓人社会が、沖縄は韓人社会と本土との中間ないしは後者に近く位置づけられるとする（二七四頁）。

松園・中根は、四社会を同じ位置に据えているが、中根の視点は、同一レベルでの比較指標軸の不明確性、地域変差の無考慮さなど、またややもすると存在形態的比較に終始している点は、多くの問題を含んでいる。松園はそれらの比較指標軸によ

る具体的資料に基づく考察を展開させてないが、その視点は、その点、すぐれて構造論的であり、比較研究において有効性を発揮するように思われ、今後の成果が期待される。山路は、一方で、沖縄（本島近隣諸島）の門中組織や養取慣行との比較で、中国人社会の父系出自観念の強さを指摘し、他方で、本土の〈イエ〉と沖縄の家は、原理的には共通性を有するが、後者が〈父系原則〉を執拗に固辞する点に差異を見出し、意欲的に本土と沖縄の親族組織を比較する手がかりを求めている。

婚姻に関しては、民俗誌や調査報告書などのなかで、婚姻習俗として多く記述されている。それらによると、婚姻規制は、agamous、居住規制は、virilocal residence（男処婚）が大勢をしめ、地域によっては一次的訪妻をともなうところもある。奄美・沖縄にかけての婚姻資料を集大成した、瀬川清子『沖縄の婚姻』（岩崎美術社、一九六九）、兄弟姉妹・親子関係との相関関係で婚姻を位置づけた、大胡欽一「贈与・交換の社会構造」（『政経論叢』三七の一・二、一九六九）は、示唆するところが大きい。

祭祀組織と村落　村落構造と祭祀組織の相関関係を究明するという視点から、琉球社会をとらえようという試みは、日本民俗学会編『沖縄の民族学的研究―民俗社会と世界像』（一九七三）でなされている。奄美・本島・宮古群島・八重山群島を各執筆者が、〈村落構造と祭祀世界〉という統一テーマのもとに論を展開している。ここでは、それを軸にしながら紹介することにする。

本島に関しては、仲松弥秀が、〈祭祀的世界の反映としての集落構成〉というタイトルで村落をとりあつかっている。仲松は、村落を〈オソイ〉（神）と〈クサテ〉（村の守護神＝御嶽の神＝「真の血縁的氏祖神」）の信仰に裏うちされた生活の場として把握している。そして、村落の立地・聖地・宗家と分家などの空間的掌握につとめ、そこから世界観の考察へと論を進めている。仲松の、この視点は、長い調査体験から得た「お嶽の本体」（『沖縄文化』二、一九六一）以来の一貫とした主張であり、沖縄の人びとのもつ奥深い信仰体系を体験的実感として提示したもので、琉球民俗文化の解明に大きな示唆を与えているように思われる。

ここで、沖縄の村落を、親族体系・祭祀との関連で把握しようとする論文を紹介しておこう――村武精一「琉球民俗文化解読のために」（『沖縄学の課題』木耳社、一九七二）・「沖縄民俗文化への構造論的接近―社会人類学的一考察―」（『第二八回九学会連合大会講演要旨』一九七四）・（一九七一a）、大胡欽一「祖霊観と親族慣行―琉球祖先崇拝の理解を目指して―」（『沖縄の民族学的研究』一九七三a）・「沖縄の社会構造―時間と空間に関連して―」（『現代のエスプリ』七二、一九七三b）。

村武は、まず、村落を〈物質的・政治的・祭祀的団体としての生活空間〉としてとらえ、さらに、〈descent・家・ヤシキ〉〈親族集団・祭祀集団〉〈琉球の神話・説話や祭儀の世界（祭祀的空間としてのムラ）〉や〈他界〉と不可分に融合した小宇宙として、カテゴリカルに位置づけているように思われる。すな

わち、村落は、慣習法協同体（物質的基盤、宗教的・呪的シンボルや神話などを共有する）であり、御嶽などの聖域や stranger としての来訪神（〈アカマタ・クロマタ〉、〈ニイルピトゥ〉など）を仲介物・者として、祭祀的世界や他界と交錯しているシンボル空間と考えられる。村落を世界観が具体的に表現されたものとして明確に位置づける村武の視点は、沖縄社会を統合された全体としてとらえるうえで、不可欠かつ生産的であると評価できよう。こうした視点と類似する位置づけは、大胡の論文においてもなされている。〈シマ〉は、〈集落の創設にかかわる神話的伝承と集落の聖域構成が結合し、一つの《聖なる世界》の存在〉としての〈民間宇宙観〉の表現でもあり、同時に〈集落ないし日常生活展開の場を意味〉し、〈慣習法上の完結した生活領域〉であると規定される。そして、〈シマ〉の四囲に存在する〈聖域の外縁〉が、〈人々の観念する世界との中間的・政治的ないし知識としての生活圏〉と位置づけられるという大胡の論考は、そのことを如実に示している（一九七三a、一七一―三頁）。仲松の体験的実感として表現された村落は、村武・大胡においては、カテゴリカルな空間論として類別・展開されたと考えられ、前者の豊富な調査資料および報告を、後二者の視点から再分析することによって、より大きな成果が得られるように思われる。

いずれにせよ、従来の〈共同体論〉的発想・方法だけでは、沖縄の村落を充分に把握し得ないという示唆は、明確に理解されよう。

本島の祭祀組織をとりあげるまえに、従来の研究成果を手がかりに、その大まかな実体を述べておこう。――年中行事の神事などに際して祭祀集団は形成され、御嶽（ウタキ）・〈アシャゲ〉などの拝所（聖域）を巡拝し、祭祀を実修するのは、〈根神（ニーガミ）〉を指導者とする女性神役〈神人（カミンチュー）〉の団体である。根神は、草分け筋の家〈根所（ニードコロ）〉の当主〈根人（ニッチュー）〉の姉妹〈オナリ〉から選出される。しかし、按司時代から琉球統一王朝成立期（一四～五世紀ころ）に、〈祝女（ノロ）〉が前述の神役に加わることによって、現在の、出自集団（門中・バラなど）の祖先祭祀（清明祭・水拝み・盆など）には、根神・根人・クデイの祭祀団体、特に農耕と関連した公的祭祀には、祝女以下の女司祭者団体、という祭祀的二重構造をひきおこしたとみなされている。（祭祀団体のこうした把握への異論もあるが）――それゆえ、従来から、研究対象は、（本島に限らず）神人の団体構成、祭祀組織と親族組織、神役の継承、〈オナリ神〉信仰や聖域などが中心になってきた。

その点を考慮して、大胡欽一「沖縄・伊平屋島田名部落の儀礼的慣行に関する覚書」（『政経論叢』三七の五・六、一九六九）、松元保羅「村落祭祀と bara 祭祀」（『都立大学社会人類学研究会報』六、一九七〇）、村武精一編「沖縄村落社会の祭祀的世界―沖縄本島南部・真栄里の調査から―」（『明治大学政経学部・社会学関係ゼミナール報告』八、一九七二）、牛島巌（一九七三）、をとりあげてみよう。

大胡は、〈宗教的―儀礼的諸相〉の実修に関与する神役組織（祭団）と親族組織の相関関係から、村落統合の様態を考察し、

部落全ての門中が神役組織に参加していない点を指摘している。牛島は、祭祀組織（団体）を、島全体・村落・親族の三レベルから考察し、高級女司祭者としての〈君南風（きみはえ）〉と部落の祭祀指導者としての祝女（のろ）の関係、根所の火の神管理と祭祀にあたる根神を中心とする女司祭者団体と、御嶽および村落の公的祈願にあたる〈ヌル〉以下の公的女司祭団体との、祭祀的二重構造の存在、根所の家筋を中核とする根神団体と、他の家筋グループを代表する神女団体という、女司祭者団体の二重構造の抽出など、多くの側面から鋭い分析を試みている。村武編（一九七三）においては、年中行事、神役組織・綱曳きなどに表象するシンボルを象徴的二元論でとらえようとしている。

前に提示した〈典型的〉な祭祀組織は、村武編ではほぼ同じ様相を示すが、南部の奥武島の祭祀を報告した松元は、村落祭祀に若干の差異を認めている。久米島では、〈本島の縮図的形態〉と把握され、北部の伊平屋島では、多様な様態が提示されている。

こうした地域的変差を認めたうえで、具体的資料に基づく比較研究から村落および世界観と関連づけて、祭祀組織を解明することが、まず必要であると考える。

奄美に関しては、須藤・渡辺が、親族組織・祖先祭祀・世界観を関連づけて考察している。祖先祭祀の時期・性格をとおして、祭祀（集団）単位と親族組織との付合関係をとらえている。奄美の祭祀組織の研究は、九学会の調査以降、ほとんど進展してない、その意味で、牛島巌他「鹿児島県大島郡与論島調査報告」（『南山大学文化人類学研究会会報』七の一、一九七三）における〈シニグ祭〉の総合的把握は高く評価される。ほかに、杉本博子「徳之島浜下り行事について」（『都立大学社会人類学会報』七、一九七二）がある。

先島（宮古・八重山）地域に関しては、本島との比較で、多くの問題点が指摘されてきた。本島の門中を単位とする祭祀集団は欠如するが、各村落内に〈ワン〉〈オガン〉などと指称される一定の聖域と結びついた祭祀集団が存在する点、本島は原則として一村落一御嶽であるが、先島の村落は複数の御嶽で構成される点、また、そのような祭祀集団への帰属において、本島（中・南部）では男系血筋にそって排他的であるが、先島では自由な選択（父系・母系・双系ないし二重ないし並行単系）の可能性がある点、などである（村武一九六六、一九七一b）、宮良（一九七三a、後掲）。

宮古島に関しては、野口武徳の池間島を中心とした詳細な事例が報告されている。比較的、調査が手薄だった宮古に目をつけた論文として、比嘉政夫「宮古多良間島の祭祀組織の分析」（『社』二の三、一九六八）、牛島巌「琉球宮古島の祭祀構造研究の問題点―来間島の祭祀組織を中心に―」（『史潮』一〇六、一九六九）、鎌田久子「宮古島諸部落の神役名称」（『日本民俗学』七八、一九七一）、岡本恵昭「宮古島の祖神祭―狩俣・島尻村を中心として―」（『沖縄のまつり』一七、一九七一a）・「宮古島の祖神祭について」（『南島の民俗』一九七一b）、水野悦子「沖縄離島における祭祀組織の展開―来間島を中心として―」（『日

本民俗学』八三、一九七二)、中山和芳「沖縄県伊良部島の祭祀組織」(『社』五の一、一九七二)があげられる。

比嘉は、クライナーが提示した神観念の二類型間の差異を、「琉球の祭祀と世界観―〈ニルヤ〉と〈オボツ〉の分析―」(『都立大社会人類学会報』五、一九六八)で考察し、祭祀集団の組織原理のちがいに求めて、調査資料によって検証を試みた。すなわち、〈スツウブナカ〉と〈イムウブナカ〉という二祭祀をとりあげ、前者は、竜宮(ニライ・カナイ)の神を祭祀対象にし、限定世代的な組織集団、後者は天上(祖先)を志向する神観念に裏づけられ、〈ムトゥ〉(草分け筋を軸とする祭祀団体=筆者記)を中心として、超世代的性格を有する組織(構成は変差に富むが)など、によって実修されることを示唆している。牛島も、比嘉と同じ視点から、他界観や神観念・祭祀組織を分析した。祭祀構造において、〈御嶽を中心とした祭祀団体〉と〈草分け筋を中心とした祭祀団体〉の類別に意をそそぎ、前者が、〈ツカサ〉を頭とする女性神役より形成され、部落の公共神事とかかわり、後者が、宗家を中心に父系的家筋に属する家家より構成され、子孫繁栄の祭祀などと関係していることを指摘している。さらに、その二種の団体を周辺部落と比較し、三類型を設定し、また、〈ムトゥ〉が門中と異なる点も主張している。

比嘉・牛島は、祭祀行事・祭祀組織とそれぞれ異なる対象からのアプローチであるが、いずれもクライナーの視点に基づき、異質な神観念(世界観)と祭祀集団との構造原理を摘出している。こうした比嘉・牛島の論究は、複雑で変差にとむこの地域の祭祀組織解明に、緒口を与えた点で卓見といえるが、反面、その二類別法で、多岐・多様な現象をどこまで把握可能かという疑問も生ずる。岡本のは、狩俣・島尻に伝承される女性秘儀である祖神祭の詳細かつ貴重な報告である。

八重山群島に関しては、宮良高広の明解な分析があり、各島に、〈御嶽での祭祀を主祭する世襲的な《トゥニムトゥ》と称する宗家〉の存在を指摘している。その祭祀集団(氏子集団)への帰属において、(A)出生によるものと(B)居住によるものとに二類別している。これについては、馬淵東一「波照間島その他の氏子組織」(『日本民俗学会報』四一、一九六五)で提示した〈血筋・家筋・屋敷筋〉の分析概念は、その有効性のゆえに、多くの研究者の不可欠な分析道具となっている。この地域の祭祀組織をとりあつかった論文をあげると、比嘉政夫「八重山川平における御嶽をめぐる儀礼と祭祀組織」(『民族学研究』三四の一、一九六九)、宮良賢貞「根来神"まゆん・がなしぃ"について」(『沖縄文化』九の一・二、一九七一)、笠原政治「黒島報告(Ⅰ)」(『世』創刊号、沖縄文化研究会、一九七二a)・「黒島報告(Ⅱ)―神役送定のメカニズム―」(『世』二、一九七二b)「神役組織再編成の局面―八重山・黒島の事例分析―」(『南島史学』三、一九七三)、村武精一編「八重山村落の祭祀的世界―竹富町小浜島―」(『明治大学政経学部・社会学関係ゼミナール報告』九、一九七三)、宮良高弘「祭祀組織と村落構造」(『八重山の社会と文化』本耳社、一九七三)である。

比嘉は、諸儀礼や御嶽の性格や祭祀組織などに、二元的な観念が存在することを指摘している。笠原は、御嶽を核として形成される〈ヤマシンカ〉と称される祭祀集団の構造を、豊富な資料考察と多方面からのアプローチによって分析・解明につとめている。この報告書にもられた内容・視点は、地道な資料収集と忠実な分析操作、総合的な解釈など、われわれ研究者が学びとる要素を多く含んでいるように思われる。村武編では、村落社会生活で大きな位置をしめている聖域祭祀集団の究明を中心にして、葬墓制、年中行事にみられる諸儀礼、来訪神観念などから、祭祀的世界としての村落を、象徴的二元論の世界としてとらえようとしている。

八重山の〈アカマタ・クロマタ〉祭祀については、宮良高弘の一九五二年論文を改稿した「八重山群島におけるいわゆる秘密結社について」(『沖縄学の課題』本耳社、一九七二)・(一九七三)や村武編(一九七三)で報告されているが、従来の視点・解釈を具体的・理論的に発展させてはいないように思われる。

先島の村落と祭祀組織の究明には、比嘉・牛島の方法論を含め、琉球文化全体を視座におきながら個別地域研究を進める方法論の確立が必要であるように思われ、その意味で、村武・大胡のアプローチは、示唆的である。

象徴的二元論をめぐる諸問題　琉球民俗文化の深層に潜む宇宙観とか世界観の研究に、社会人類学(構造論)的な象徴的二元論の光をあててとらえようとする視角を打出したのは、村武精一 "Dualism in the Southern Ryūkyūs" (Archiv für Völkerkunde, Wien, Band 19, 1964/5) と馬淵東一 "Toward the Reconstruction of Ryukyuan Cosmology" (Folk Religion and Worldview in the Southwestern Pacific, (eds), Matsumoto, N. & Mabuchi, T. Keio Univ. 1968) である。戦前・戦後をとおし、この分野の研究は、民俗学的、文化史的・比較民族学的視座から、来訪神にまつわる諸観念に顕現する他界観と神観念やその系統の問題などをめぐって展開されてきた。

村武は、八重山村落社会における、綱曳き行事・爬竜船行事・節(結願祭)・来訪神信仰(アカマタ・クロマタやマユンガンス)などの祭祀的世界を、象徴的二元論の世界として把握した。その世界に、一貫して潜在する諸表象を、東—西(北—南)、男性—女性、赤—黒、太陽—月などの二項対照ないし対立(antithesisor opposition)として摘出でき、それを原理として各村落また村落連合が、一個の小宇宙を構成していることを指摘した。そして、それらの類別原理(象徴二元論的ないしそれを基礎とした三元論的)の個別村落における変差をとらえる視点で、四つのタイプを設定した。馬淵は、琉球全体を視野において、宮古島の起源神話をはじめ、家屋の間取り、屋敷内の構成、屋内外の祭壇の位置とそこで実修される諸儀礼や来訪神慣行、綱曳き・舟漕ぎ競争などの諸行事を考察して、基本方位をめぐる諸観念から、二元論の基本類型を設定した。さらに、それらの中に表象される、シンボルの二項対置(apposition)もしくは相互補完的な転換関係の組合せから、琉球の宇宙と社会の全

体構成体に貫徹している基本的な類別化原理（宇宙観・世界観）は、ある範疇を付加することで二部分制・三分制（bipartition tripartition）へ発展しうる〈Shifting dualism（転移的二元論）〉であることを指摘した。

馬淵論文は、村武とは別の観点から、全琉球的規模において、個別的に顕現する二元的諸現象に全体的な脈絡を与えた点で大きな意義を認めることができるが、他方、村武論文と比較してみると、村武の一つの軸であった村落共同体に対する視角が欠けているように思われる。伊藤幹治（一九七三、後掲）が、村武と馬淵の双分的なシンボルの組合せをめぐってのアプローチのちがいは、〈前者が、その類型化を志向して、八重山的世界観の類型論〉を展開したのに対して、〈後者は、シンボルの相互連関性に視点を設定し、全沖縄的世界観の関係論的分析（relational Analysis）〉（二一〇頁）を試みている点にあると研究史的に位置づけている。しかし、村武が、八重山の各村落において、諸儀礼・諸観念などに現われたシンボルの意味連関を追求している面を考慮すると、全面的には首肯できない。

この村武・馬淵の視点・方法論をくみいれて調査ないし資料分析を試みたのが、比嘉（一九六九）、牛島（一九六九b）、渡辺（一九七一c）・「沖縄の世界観についての一考察—東村字平良を中心として—」（『日本民俗学』七八、一九七一f）である。牛島は、他界観・神観念や祭祀組織の分析をとおして、二元的な構造を指摘している。渡辺（一九七一c）は、本島北部一農村の世界観に北〜東＝山↕南〜西＝海という方位軸が析出されるが、場面に応じて、諸要素のコンプレックス・対立（傍点筆者記）、duality（二元性）に triad（三元性＝筆者記）の存在、機軸の流動など、も見出される点を指摘し、dualism に対して次のような疑問を抱く。すなわち、沖縄の世界観研究における二元論的視角は、個別村落レベルでは有効であるが、〈沖縄全体〉へ一般化するには問題が多いという点にある（渡辺一九七一f、一九頁）。それは、個別化と普遍化との止揚という意味においてならば、説得力があろう。渡辺のいう場面に応じた多様性を、伊藤（一九七三）は、収穫儀礼の分析において《状況の論理》（行事がおこなわれる状況それ自体に内在する論理）としてとらえている（二四二頁）。この点は、馬淵・村武において、どのようにとらえられるのか、興味ある二者の提言である。

村武は、沖縄南部一村落の調査資料と馬淵の視点を土台に、前論を発展させ、沖縄民俗文化解読を目指す、パースペクティブな象徴的二元論を展開している（村武一九七一a、一九七二、一九七四）。村武は、馬淵が析出した二項対置（ないし相互補完的転換）関係にあるシンボル・カテゴリーを、《シンボル空間の構造》概念でとらえようとした。右と左、東・南と西・北、山（陸）と海（川）……などの二項対置関係よりなるシンボル空間は、〈シマ〉〈ヤシキ〉・綱曳きなどの行事や神話・説話、さらには、琉球文化・諸々の現象に見出せることを示唆している。村武は、こうしたアプローチで、琉球民俗文化における意味の世界（傍点＝筆者記）を解読しようという、きわめて認識論的視点を提示する。こうした発想は、〈人間・文化は、自然と親密な

関係にあるばかりでなく、いまみたところのシンボル空間（文化）に、自然がつつみこまれている〉点に、琉球民俗文化における〈自然観・宇宙観〉の特質があるというとらえ方に根ざしているように思われる（一九七二、一五九頁）。〈村落空間〉をくみ入れた点と、個文化における〈意味世界〉の認識論的把握への志向性を内包する点で、村武の視点は啓示的であるとともに、馬淵（一九六八）の枠を拡大・発展させたと考えられる。八重山の一村落を舞台に展開されている（村武編、一九七三）。実際の調査とその資料に基づく、村武の検証の試みは、八重山の一村落を舞台に展開されている（村武編、一九七三）。

伊藤幹治の「神話儀礼の諸相からみた世界観」（『沖縄の民族学的研究―民俗社会と世界像―』一九七三）は、村武・馬淵の延長上に位置づけられるが、とくに〈馬淵理論〉を背景に、独自の範疇・概念を設定し、沖縄の世界観の再分析を試みた点で注目される。しかし、馬淵の〈関係論的分析〉に準拠した分析方法で析出された儀礼的世界や神話的世界（象徴的世界）の〈論理や諸原理〉と、個別的に現出する二元的な諸現象とに、全体的脈絡（意味的連関）をつける積極的・具体的方向づけが見出されないのは気になるところである。その意味で、この〈象徴的世界の論理や諸原理〉と、実態調査から摘出される〈社会論理と構造〉との関連性の追求を目指す伊藤の成果がまたれる。

こうした諸研究を一層展開させるには、宮古島の起源神話を軸に類別化した馬淵の原理と象徴的世界から析出された伊藤の〈論理・諸原理〉を個別地域社会にあてはめてみる必要がある。逆に、本島南部一農村の村落空間から抽出した村武のモデルを、全琉球村落社会に適用する作業も不可欠である。いずれにせよ、これら三者の理論の蓋然性を検証し、あるいは、具体例とのずれを考慮し、修正を加えてゆくという方向が、今後に残された課題である。

ほかに、世界観をとりあつかったものをあげておこう――比嘉政夫（一九六八）・「常世神と他界観」（『古代の日本―風土と生活二―』角川書店、一九七一）、小野重朗「海と山との原郷―南島文化二元論―」（『沖縄の思想』木耳社、一九七一）、本永清「三分観の一考察―平良市狩俣の事例―」（『琉大史学』四、一九七三）。

すでに枚数もつきたので、以下の項は、村落社会（生活）に関係すると思われる論文の列挙にとどめておきたい。

葬墓制と村落生活　平敷令治「沖縄の葬制について」（『日本民俗学』七四、一九七一）、宮城盛孝「沖縄の葬式習俗について」（『琉大史学』二、一九七一）、宮田登「ティラについて」（『南島の民俗（第一次報告）』一九七一）、赤田光男「徳之島上面縄の豊年予祝祭と墓制」（『日本民俗学』八一、一九七二）、桜井徳太郎「宮古本島の移葬・洗骨・墓制―とくにクツヲウッァヌ習俗について―」（『民俗学評論』九、一九七二ａ）があげられる。宮古各地における葬墓制（とくに移葬・洗骨・墓型）の展開過程を、住民の死者観・死霊観・他界観などとの関連で考究する必要性を指摘した、桜井の視点は注目される。

村落生活における信仰　道教を研究テーマに、中国・沖縄の比較研究を続けている窪徳忠の一連の業績は、興味深い。窪徳

忠「沖縄の竈神と火神」(『民族学研究』三四の二、一九六九)・「道教の竈神と沖縄の火神」(『民族学研究』三五の三、一九七〇a)・「沖縄地方の上帝君信仰」(『東洋文化』四八・四九、一九七〇b)・「沖縄における中国的信仰」(『人類科学』二三、一九七一)およびそれらの集大成である『沖縄の習俗と信仰―中国との比較研究―』(東大出版会、一九七一)・「沖縄と中国文化―比較研究の必要性―」(『沖縄学の課題』木耳社、一九七二)。沖縄の村落生活において、大きな役割を果たす〈ユタ〉と呼ばれる霊的・呪的職能者に関する研究について、饒平名健爾「沖縄の民俗調査―若干の考察―」(『琉大史学』一、一九六九)・「シャーマニズムの考察―宮古・伊良部村佐良浜の事例から―」(『琉大史学』四、一九七三)、桜井徳太郎「ユタの関与する死の儀礼」(『日本民俗学』七六、一九七一a)・「〈ユタ教〉の成立」(『南島の民俗(第一次報告)』一九七一b)・「〈ツカサ崩れ〉とユタマンチャー―琉球巫俗の一つの問題―」(『日本民俗学』七九、一九七二b)・「沖縄シャーマニズムの原点―ヌジファと霊魂観―」(『沖縄学の課題』木耳社、一九七二c)およびそれらの集大成である『沖縄のシャーマニズム』(弘文堂、一九七三)があげられる。この職能者をそれ自体の有す性格からシャーマニズムとして把握しようとする二者に共通した方向と同時に、それの村落社会においてもつ意味を究明するという方向も、見逃せないように思われる。また、八重山群島の農耕儀礼・来訪神と日本各地の諸儀礼などの比較研究から、〈世直し〉観念の民俗的意味を究明した、宮田登の「〈世直し〉とミロク信仰―日本におけ〈世直し〉の民俗的意味―」(『民族学研究』三三の一、一九六八)、それを展開させた『ミロク信仰の研究―日本における伝統的メシア観―』(未来社、一九七〇)は、示唆にとむ論究である。

ほかに、島袋源七「沖縄の民俗と信仰」(『村落協同体』木耳社、一九七一)、野口武徳「南島の船霊信仰」(『現代諸民族の宗教と文化―社会人類学的研究―』社会思想社、一九七二)があげられる。

年齢階梯と集団に関しては、平山和彦「沖縄村落自治制と若者組織」(『南島の民俗(第一次報告)』一九七一)に、若干の指摘がなされているほかは、従来の論点を展開させていない。

村落民俗誌・調査報告書その他　沖縄の日本復帰とあいまって、数多くの沖縄文化に関する研究書・叢書が出版された。

まず、村落民俗誌・叢書をあげておこう――平山輝男編『薩南諸島の総合的研究』(明治書院、一九六九)、鹿児島民俗学会編『奄美の島・かけろまの民俗』(第一法規出版、一九六九)、竹内譲『喜界島の民俗』(三元社、一九六九)、窪徳忠編『沖縄の社会と習俗』(東大出版会、一九七〇)、沖縄文化協会編『沖縄文化論叢』(法政大学出版局、一九七〇)、谷川健一編『村落共同体―叢書わが沖縄第四巻―』(木耳社、一九七一)、馬淵東一・小川徹編『沖縄文化論叢三―民俗編Ⅱ』(平凡社、一九七一)、宮良高弘『波照間島民俗誌』(木耳社、一九七二)、野口武徳『沖縄池間島民俗誌』(未来社、一九七二)、谷川健一編『沖縄学の課題―叢書わが沖縄第五巻―』(木耳社、一九七二)、源武雄『日

本の民俗四七—沖縄—』(第一法規出版、一九七二)、稲村賢敷『宮古島庶民誌』(三一書房、一九七二)、宮城文『八重山生活誌』(一九七二)、恵原義盛『奄美生活誌』(木耳社、一九七三)、宮良高弘編『八重山の社会と文化』(木耳社、一九七三)、大胡欽一・宮良高弘編『現代のエスプリ七二—沖縄の伝統文化—』(至文堂、一九七三)。

調査報告書に関して、村田熙編『加計呂麻島の民俗—カケロマ民俗調査報告書—』(鹿児島民俗学会、一九六九)、西南日本民俗総合調査団編『南島の民俗(第一次報告)』(東京教育大民俗学研究室、一九七一)があげられる。

つぎに、個別地域社会のインテンシィヴな調査を試み、恒常的に示唆深い報告書を提示しているものをとりあげておこう——『明治大学政経学部・社会関係ゼミナール報告』の、大胡欽一編『沖縄の社会と民俗—玉城村舟越の事例報告—』(七集、一九七一)・「バラ社会の構造—南部沖縄・玉城村富里の事例報告—」(八集、一九七二)、村武精一編「バラと村落の社会的・空間的構造—沖縄本島南部・真栄平の調査から—」(七集、一九七一)・「沖縄村落社会の祭祀的世界—沖縄本島南部・真栄里の調査から—」(八集、一九七二)・「八重山村落社会の祭祀的世界—竹富町小浜島—」(九集、一九七三)、琉球大学民俗研究クラブ『沖縄民俗』の、「与那部落・宮城部落報告」(一七号、一九六九)、「砂川部落・南風原部落報告」(一八号、一九七〇)、「池間島・島尻部落報告」(一九号、一九七二)、沖縄大学沖縄学生文化協会『郷土』の、「座間味島・西表島調査報告」(八号、一九七〇)、「国頭村比地部落・与那国島調査報告」(一〇号、一九七一)、「本部町備瀬部落・第三次宮古島調査報告」(一一号、一九七二)、「今帰仁村今泊・第四次宮古島調査報告」(一二号、一九七三)。

九学会連合の沖縄総合調査における村落研究　九学会による沖縄調査は、一九七〇年の研究体制のあり方(周辺諸科学との関係)に関する討論を経て、七一年から七三年にかけて実施された。三年間の総決算ともいうべき、各学会からの報告および総合討論会が、七四年五月になされている。村落研究においては、とくに、社会学会、宗教学会、地理学会、民俗学会、および民族学会の成果が注目される。

ここで、上記の各学会による村落のとらえ方について簡単に紹介しておこう。

社会学会——社会経済史的共同体の観点からの把握。

宗教学会——宮古島の一村落の具体的把握とそこに現出する祭祀組織と宗教的行為の関連の考察。

地理学会——生活空間と村落の関係および祭場を中心とした村落形成史の視点からの把握。

民俗学会——直接的には、村落研究に寄与する形での成果はなかったが、過去の沖縄研究や九学会連合の仕事のなかには有益な内容を含んでいる側面もある。

民族学会——従来の沖縄研究が文化史的民族学の研究に片寄っていた点を鑑み、社会人類学的研究に視点をおいた。〈地域社会と祭祀世界〉という共通テーマのもとに、方法論を規制せず、各人が個々のアプローチでたち向かった。その

結果、祖先祭祀と親族組織、先島の cult group（祭祀集団）、〈ユタ〉（霊的・呪的職能者）の果たす儀礼行為、象徴的空間論の分析などの各側面から、村落社会および村落生活を明らかにしようとした。これらの成果は、近く報告書に展開される予定である。

なお、本稿を草するにあたって村武精一氏より、九学会連合の村落研究に関する情報提供をはじめ、御教示いただいたことと、渡辺欣雄氏に御一読願ったことを付記し、感謝の意を表します。

（須藤健一）